

おわりに

～未来への提言～



たくさんの方々のご尽力・ご協力によって、本誌を刊行することができました。心から厚く御礼申し上げます。

刊行にあたり、半世紀にもわたる交流の歴史を振り返り、多くの皆さまに交流への思いを語っていただきました。本誌では詳しく紹介しきれなかった取り組みや、功労者の方々の声も多くございます。その一つがこの50年を彩る貴重な「兄弟都市交流」に他なりません。交流がこれほど長く続いてきたのも、その時々皆さまが自発的に連携・協力して取り組んでこられたからです。そして、その取り組みに共感し、自らも担い手となって参加してくださった両市民の皆さまが育んできたのではないのでしょうか。

およそ1,200キロ離れた豊中市と沖縄市。もちろん人々の暮らしも歩んできた歴史も違います。統治の変遷、戦争体験、その後の復興や地域社会の状況も大きく異なります。こんなにも異なるヤマト（本土）と琉球（沖縄）の遠く離れた自治体が出会いました。それは偶然のきっかけが生んだ出会いでしたが、この出会いが交流へとつながり発展したのは、過去を振り返り、現在を見つめ、未来を確かなものにしていきたいという熱い思いの共有があったからだと思います。改めて振り返ると、両市の先人たちが紡いできた兄弟都市交流、それは「霊石」と「豊中学校」が象徴しているとおり、平和を希求する強い思いとそれを確かな絆へとつなげていく取り組みから始まりました。こうして生まれ育まれてきた交流は、50年の間に多世代に、そして平和・スポーツ・文化・教育など多分野に広がっていったことで、遠く離れていても、環境が大きく異なっても、互いに思いやることができる強固な絆へと発展していきました。

いちゃりばちよーでー。「一度でも出会えば、それはもう兄弟のようなものだ」という意味の沖縄の黄金言葉（くがにことば）です。兄弟都市の由来ともいわれているこの言葉は、兄弟都市交流の歴史の中でもさまざまな場面で見ることができます。1964年（昭和39年）にコザ市の大山朝常市長と豊中市の竹内義治助役が出会い、豊中学校や職員野球交流で両市職員が出会い、平和交流やスポーツ交流で若い世代が出会い、豊中まつりやピースフルラブ・ロックフェスティバルなどで多くの市民が出会ってきました。そして兄弟となって新たな交流へと発展していったのです。

兄弟都市提携50周年のテーマは「出会えば兄弟（いちゃりばちよーでー）～友好の絆を次世代へ～」です。50年という長い月日を経て、今後も兄弟都市の“つながり”は続いていきます。51年目はすぐそこです。新たな50年、そう100周年へと両市の歩みは始まっているのです。次の一步を踏み出すために、「いちゃりばちよーでー」の言葉のとおり、新たな出会いを生み出し、次世代の交流へつないでいくことがこの50周年なのです。

多様な文化交流と共生をめざす取り組みから、平和で暮らしやすく活気に満ちた地域社会づくり、さらには、これからの本土と沖縄の望ましい関係づくりへと歩みを進めることができるのではないのでしょうか。この兄弟都市交流が、未来を担う子どもたちへ、お互いをいとしむ心を育みながら共に生きていく大切さを伝えていくことにつながることを願ってやみません。夢は大きく、歩みは一歩ずつ、これからも心が通い合う交流を共に取り組んでまいりましょう。

皆さま、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

豊中市 沖縄市



少年の像「合奏」